

学校名：横浜市立みなと総合高等学校

担当教科：地歴・公民科

氏名：智野 豊彦

1. 今回の研修における目的やねらい

日本と東南アジア諸国とは、経済的に深いつながりがあり、また横浜にはカンボジアをはじめ多くの東南アジア出身者が在住している。限られた授業時間数の中で少しでも臨場感を持って生徒に理解させるためカンボジアで現在を生きる人、風土、習慣などから地歴・公民科にかかわる教材を収集する。また、国際理解や貢献について、生徒が主体的に思考する意識を醸成するために、援助のあり方、自己への相対的複眼的な視点などに有効な教育素材を捜す。それと同時に、教師である自分自身も国際理解教育の目指すべき方向について、見識を深める臨場感を持って生徒に理解させるための教材を収集する。以上が研修の目的やねらいであった。

2. 目的やねらいがどのくらい達成されたか

時間の少なさと言語能力による意志疎通の壁は、予想した通り高い壁となった。クメール語ができたうえで、長く滞在できれば、より充実したものとなったことは間違いない。しかし、研究者ではなく、普通の現場教員としてどれだけの成果をあげるかが肝要であり、そのような意味では目的やねらいは達成できたといえる。プログラムに組み込まれた訪問先でのインタビューでは示唆に富む話題が多く、生徒への直接的な教材だけでなく、教師である自分自身へも国際理解教育の認識を深めさせるものであった。当初の目的以外にも今後も考えていく端緒となるものも多かった。さらに、何人かの方からメールアドレスを頂いたことにより、カンボジアに対する情報収集の有効な拠点を確保できた。また、車窓からの景色や昼食場所でも授業などで提示できる教材を入手することができた。

3. カンボジア国から学んだこと

ベトナムへの国民感情などから、重層的な人間の存在や国際的な配慮の必要性がよく理解できた。同様な視点では、トゥールスレン虐殺博物館でも政治的な限界下での展示のあり方を学べた。また、第二次世界大戦における日本進駐に対する負のイメージは、長引いた内戦や巨額のODAの影響もあってか感じられなかった。

訪問先のインタビューから学んだことは多いが、ここではクメール伝統織物研究所の森本喜久男氏を取り上げる。森本氏の発言で「好きなことをやらせる」というものがあつた。同時に「石の上にも3年」「100回織り続けてやっとわかる」などの発言と重ねると、その意味することは無責任な我が儘を容認するものではなく、表面的な興味ではない本当に好きなものを選択させる厳しいものである。「世界最高峰の布を作るといふ共通の目的を達成する上での本当に好きなもの」というものは、安易な自由ではなく、実存的な選択をつきつけるものであり、自己の在り方を規定させていく決断である。このような「好きな仕事」は、単に「お金を稼ぐためだけにやるのではなく、仕事とは喜びであり、生きることと一体となったもの」なのである。生きるということが希薄になっている日本における教育への大きな問題提起であった。

森本氏の観点から後述するように、今回の研修のテーマの一つである支援や自立に関しても、労働と物乞い、自由と怠惰など考えていく糸口を得た。

4. 今回の研修経験をどのように教育活動に活用しようと思っているか

短期的には今年度9月に行う現代社会での授業の教材として生徒に提示する。今年度の現代社会では、「国際理解や貢献について当事者意識を持ち、主体的に思考する意識を醸成する」ことを目標の一つとしたが、その手段としてJICAのエッセイコンテストを利用する。コンテストのテーマが「行動～地球の仲間のために、私たちができること」であり、生徒がエッセイ作成する材料として、援助とは何か、豊かさとは何か、教育の必要性、などについて考え学ぶフォトランゲージを行う。

中期的には、他の地歴・公民科の科目、特に歴史科目の中に国際理解の視点や手法を組み込んでいきたい。長期的には、教科以外の分野に提言できるよう整理していきたい。国際理解教育を遠い異国のこととして捉えるのではなく、身近なことにつなげて考えていく姿勢や、「内なる国際化」への芽を伸ばさせるような人権教育と一体となったものを考えている。また、生きることと労働などからキャリア教育への視点も可能と考える。

5. 今回の研修に参加してよかったことや、よりよくするための提案

今回の研修は、我々への安全と健康を何よりも優先配慮したうえで、通常の旅行では観ることや交流することが難しいことを体験させていただいた。また、同行したJICA職員の方々も、多様な研修団の要求に対して、学校の授業に使える教材収集の視点にたって協力していただいた。お陰で、授業などで共有できる話題や写真が豊富に入手できた。訪問先でのインタビューも、公的なものの後、食事を一緒にとれる機会が多く、より充実したインタビューであった。また、通訳の方と寝食をともにする日数を重ねることで、カンボジアに住む人の考え方の一部を見ることもできた。

訪問先はどれも学ぶべき要素が多々あるものである。しかし、既述したように食事の時間も重要な研修要素であり、移動中の車窓からの景色も教材として使用できるものが多い。また初めて訪れる国でのマーケットの視察も販売物だけでなく、そこでのやり取りや行き来する人々に対しては、ある程度時間をかけて観察しなければ有効な教材を収集する機会を失いかねない。特に、カンボジア日本友好学園とクメール伝統織物研究所は、訪問先数のカウントは少なくなるが、ここに宿泊できた体験は、校種を問わず得ることが多かったことは疑いようがない。このため、JICAの事業やNGOなど、他にもみるべきものは多々あり、みたいという気持ちもあるが、プログラムの的にはこれ以上詰め込まない方がよいと思う。

6. その他研修全般を通じての感想・意見など

研修参加の目的のある国際理解教育については「理科教育改善計画プロジェクト」の村山哲也氏のインタビュー、援助の在り方については「日本地雷処理を支援する会(JMAS)」を柱に感想を述べる。

村山氏は、「日本とカンボジアとの違い」という本校生徒の質問に対して「日本とカンボジアの違いよりも、同じ教室にいる隣の生徒との差の方が大きいかも」と答え、その後「国際理解で大切なことは、人間をWeとTheyではなく、IとYouでみることだと思う。」と述べられた。私自身も、人間を金太郎飴のような平均化したグループで捉え、区分けして色付けしていくのではなく、顔のある個として人間をみていくことが、国際理解の基本であると考えている。これは、総合学習などを利用したムスリムとの交流を通して生徒に理解させたかった点である。ひるがえって今回の研修団をみていくと、「小学校3名、中学校3名、高校2名」、「女性5名、男性3名」など、異年齢・異校種の異文化の集まりである。差異によるグループ分けは、グループ内にさらなる差異が表面化し、「アパルトヘイト」で解決できるものではない。差異による摩擦を昇華させていく工夫も国際理解教育の目指す方向の一つであろう。しかし、人間を個として捉えていく思考にも懸念が生じた。現在の秩序が、国民国家を基盤として

おり、今回の研修そのものも、国家の存在によって成立している。個として人間を観ていくことが全面にわたるとき、同胞意識などが成立していくか疑問がある。少なくとも「ポリス的動物」である人間が、個として生きる厳しさに容易に耐えられるものではない。グローバル化の進展とナショナリズムの高揚の観点から国際理解教育について再考していきたい。

地雷など危険と貧困というネガティブなイメージにとらわれがちなカンボジアの魅力を生徒に伝えたいというのは、今回の研修参加者の多数が持つ視点であった。しかし、同時にネガティブな事実がある現実も生徒に伝え、国際貢献の芽を育てていく必要もある。地雷ではなく不発弾であったが、我々が同行したほんの1～2時間の間に数発の不発弾が発見され、処理する現場をどのように生徒に伝えていくかよく整理しなくてはいけない。JMACの西城真人氏は、「不発弾は正しい手順で処理していけば、そんなに危険なことはおきない。我々がいないときにカンボジアの人がちゃんと処理するかが不安である。」「彼らは正しいやり方を知っている、その通りにやらないだけ」と述べた。過去に対戦車地雷の処理で死者が、黄燐弾の処理で怪我をしたカンボジアの方がいるそうである。これなども支援の難しさを表す言葉であろう。しかし、「素直で純粋なカンボジアの子供たちに、自分の技術がかせる・・・毎日の活動に子供たちから力ももらっている」という発言がきれいな事ではなく、素直に頷ける魅力的な笑顔であった。援助とはどうあるものかについては、JMAS意外にも深く考えさせる題材が多々あった。自立のための援助であるが、援助に頼る姿勢をどう考えていくべきか思索中である。プレイヴェーンで小学校教員養成校に箱詰のまま積み重ねられていた電子ピアノは、無駄な援助の格好の教材として有効なものである。しかし、受け取る側にたつたときには、取りあえず給付されるのはありがたいのではないだろうか。道路をはじめインフラを援助によって整備しながら、数え切れないほど林立する豪華な寺院をどのように考えていけばよいだろうか。カンボジアの人が自分たちのお金をインフラ整備ではなく、精神的な宗教施設に向けていくことを援助という観点からはどのように考えていくべきであろうか。自分で稼いだ収入をどう使うかはその人の自由な選択である。物乞いや援助に頼る生き方に対して、「努力しないで援助に頼るのはよくない」「働かないで生きていくのは間違っている」などの声を聞くことができた。しかし、物乞いや援助を引き出すのも才覚で、その人にとっては労働ととらえられないだろうか。日本でも、税金の使用方法では同様の問題がおきていると思われるのである。援助のあり方について簡単には結論は出せないが、今後は「人格」をもった尊厳の視点から考えていきたい。また、援助する側も「情けは人のためならず」の格言の大事さを、西城氏の笑顔や発言から考えていきたい。

7. 今後の本研修参加者へのアドバイス等

教育現場にいるものにとって、訪問先でのインタビュー、移動中の景色、食事の時間、マーケット視察など、どれをとってもダイヤの原石で、あとは切り口をどうするかというぐらい収穫のある研修である。個々人は多種多様な目的・視点を持って研修に参加しているので、事前の準備段階でインタビューにおいては最低限押さえない項目はリストアップするなど共通理解をとっておいてもよいと思う。もしくは、訪問先ごとに質問するメインの人を決めておき、そのうえで、空いた時間でその場で出てきた疑問などを質問するなどの工夫をしていくことも勧める。収穫が多いということは、逆に言うと焦点がぼやけしまいかね、短い時間で通訳を介するという制限下においてインタビューをしていく際に研修団の中でストレスを感じる人間がでる可能性もあるからである。

現地では、個々人によって、観たいことと見せたいこと、聞きたいことと話したいことが整合しない場合もある。また、臨機応変な対応が求められるが、グループ行動なので同時にぶれない軸の確認もその都度してもよいと思われる。研修団そのものが異文化理解の場と、考えれば対応もより適切なものが取れていけるとと思われる。訪問先の国や風土は勿論、JICAの職員や研修に参加している人どれもが、現場で働く教員にとっては宝の山です。